

きびのきと

NO.8 月刊

昭和三十四年二月一日発行 (非賣品)
発行所 岡山県都窪郡吉備町庭瀬
(大坊)不夜院 吉備親老協会

第六編 文配者篇 第8號

○戸川達安 (その二)

前号のあらまし 「戸川達安は征韓の役に於る城に籠城し部下をして掠奪に派遣せしめて、首首中、突然敵兵が手薄を担って城を襲った。城守に老若少のものはかり、鎧に危難に瀕して、最中、派遣軍がこれを見て鋒を轉じ、後方の高地から敵の包圍軍に對して鋭く不意打をかけた」

達安は、得たり、と、志氣をカリカえ、援軍の勢に力を併せ、縦横無盡にきりまくったので、流石の虜軍も忽ち総崩れとなり多数の死傷者を戦場に遺棄したまゝ、遁走したという。偶々慶長三年八月秀吉は病死したので外征の軍を中止したのである。

(秀吉は慶長三年三月十五日受命侍女數十名を連れて、一代の榮華を誇った醍醐の觀櫓を終ると間もなく痲痺の身となり二月後には再起不能に陥った。八月十五日「つやとあや、つやとぎへ」にしりかみかな、なにわの事も中めの又中め」の辞世を遺して、六十三歳を最期として、伏見の城になくなった。半島には十万余の軍隊を止め、絶望的な敗色につつまれ、又去経の秀吉はまた幼少であつたので、死の三日前に僅り家康、前田利家、上牧景勝、毛利輝元、宇喜多、秀家の五太老に宛てた遺言状に「あとをたのみ申候、あとをたのみ申候」と繰り返して書き、一代の英雄秀吉の最期の苦悶が窺はれ、一抹の悲哀を感へるのである)。

達安は帰陣後宇喜多氏の重臣となり、専ら軍事の要職に参與した。時に老臣長船紀伊が功を恃みて志気の振舞あり、新免伊賀等と共に竊に石田三成と交を結ぶ計を計ったので、達安はこれを憤り伊賀等を却けんとした。間もなく紀伊は歿するに當り遺言して前非を悔い、達安と和睦し後事を託したので達安は宇喜多、成正、岡貞綱、花房幸次等の老臣と謀りして紀伊の股肱の臣である山田兵衛門の非をあげてこれを殺し、又中村二郎兵衛の一味をも殺さんとした。

この二郎兵衛は宇喜多秀家の室は加賀國の前田利長の女にして加賀から興入の時に扈從してきたものである。そこで秀家はこれを憫み、大いに怒り大谷吉隆によつて達安をその邸に招いて殺害せんとした。諸老臣はこれを知らず、驚き成正是自老力を引提げて吉隆の邸に赴き、途中の達安を助け帰る大谷の玉造に隠匿した。貞綱、幸次等もここに集會し、成正是真徳を糸へか願くば一同剃髪してその盟を固くせんことを誓つた。秀家はこれを捕えんとした。また果さないうちに慶長四年徳川家康は命じて急ぐ江戸へ召して岩槻へ往まはせた。成正と貞綱は間もなく岡里岡山へ歸つたという。

(二の節には左京右衛門と、宇喜多氏の組頭榎奉行を勤め、高田四十九石。岡貞綱は豊前と、組頭にして二万三千三百石。花房幸次は志保奉行にして組頭榎奉行一万四千六百六十石を食んでゐた。翌五年關ヶ原の合戦が起り達安は福島正則、池田輝政等とともに東軍家康の軍令に従つて西下し、美濃の國關ヶ原に向ふ途次、御渡川の敵陣に一番鎧を振つて敵將石田治部少輔三成、の臣、嶋左近を討取つて功名をあらわした。

(当時嶋左近が用ひた鎧は達安の賜はり、戸川定太郎に傳つたが、老年の火災に焼失し、同院は助(安丸)に傳はり、又この鎧は朝鮮の役に使用したもので、倍にトンボ切りの鎧といひ、戸川家の重宝として永く語り回す(帯江領主)に傳る有名な鎧であるが、今その所在は詳でない)。
ここに参考として關ヶ原の合戦にフツと簡単に述べてみよう。
慶長三年八月に豊臣秀吉が死して諸侯の上位にあつた徳川家康は關八州二百六十万石を領し、當時までに五十六歳になり、天下の政權を握らんとした。抱いてゐたのである。偶前田利家が病死して、石田三成は毛利輝元を盟主として上牧景勝、諸侯の勤静をうかがつていたが、東西にわかれ、軍を起さんと、計画を知つた家康は時機来れりと、いかに喜んだ。果せるかな本國今津に歸つた景勝は兵

備を修めたので家康は必らず大阪にも起ることを予期し、大軍を東上せしめた。留守中石田三成は兵を擧げ、先づ鳥居元忠の北守する伏見城を攻め、血祭りにあげた。時に慶長五年七月廿四日のことである。そこで家康はその子孫の軍勢を止めて大軍を下し、ここに東西の大軍が圍ヶ原に合して一大激戦が行はれたのである。

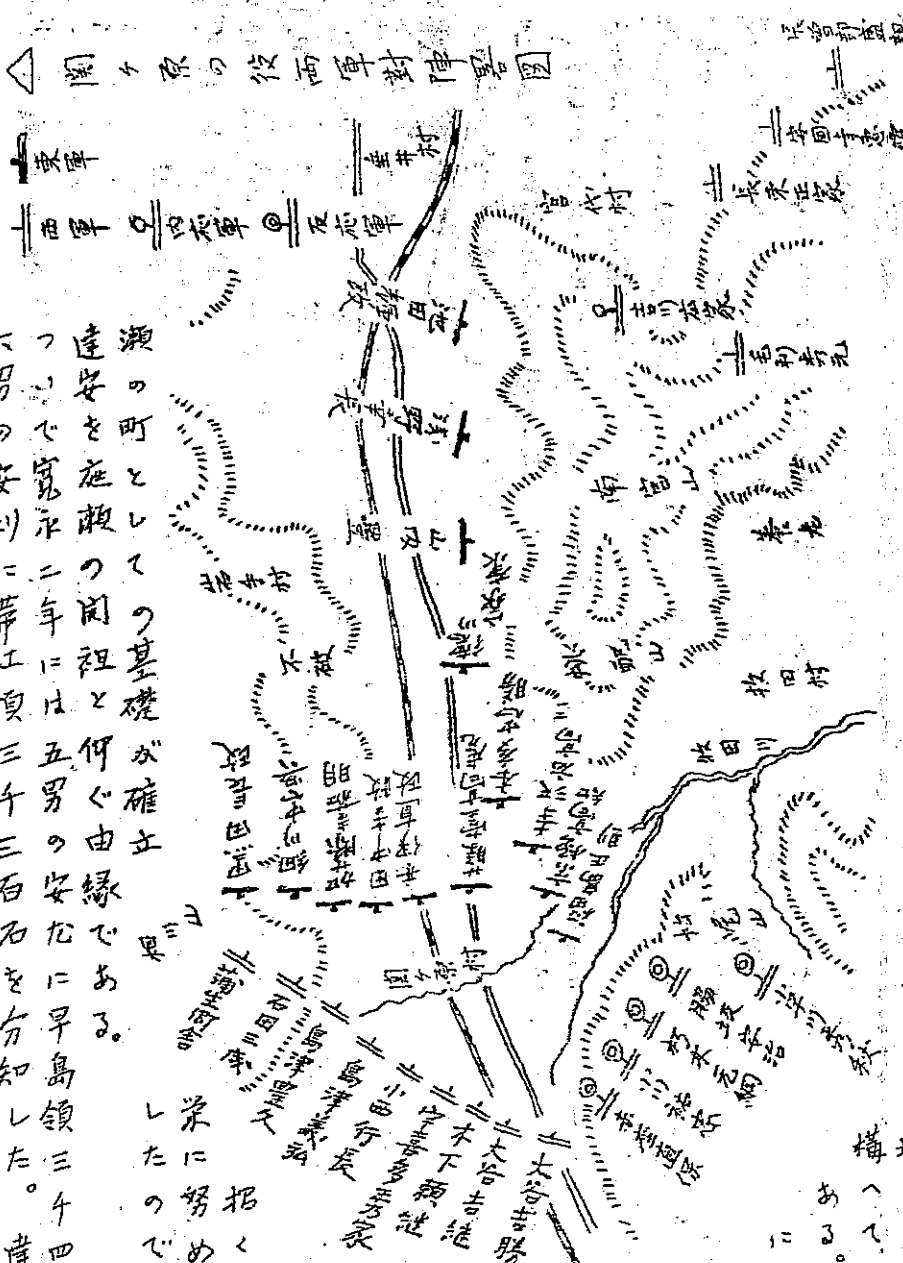
東軍は里田長政、福島正則、藤堂高虎、菅原高知、井伊直政、細川忠興等の直屬軍九万余、西軍は小西行長、大谷吉隆、安國寺惠瓊、長束正家、宇喜多秀家、毛利秀元、小早川秀秋、長曾我部元親、島津義弘等八万余の精銳である。天下合戦の北關は九月十五日の夜明けから暮は却つて落された。数時間前に亘つて激戦は展開され、西軍はよく戦ひ一時優勢にみえたが、ここに小早川秀秋、脇坂安治等の裏切によつて戦局は一変し大谷吉隆は自殺して西軍の敗北にきした。三成、行長、惠瓊等は捕はれ、他の他政易一家、滅封四家は八丈島に流罪となり領地は没収せられた。その他政易一家、滅封四家に及び徳川の領地は實に六百四十二万余石に達したのである。

首謀者の石田三成は捕はられた時、下痢して衰弱していたが、家康の前へ引かれて行く途中昇然として大音にさげんで、東軍に組した福島正則と裏切者の小早川秀秋を罵倒し、後で刑場の露と消えたのである。

(小早川秀秋は岡山城主五十一万余石に封せられたが慶長六年在死し一代にして絶家した。福島正則は福島四万余石の領主となつた元和元年幕府の忌避に餘りて持後岡田島領主四万余石に移され、賤手は叔父の生産を送り死後絶絶した。田原康報とよむべきである。正則はもと捕虜の伴をうけしと懐へられる。)

戦後軍功によつて達安は慶長七年四月に都守、賀陽兩郡の内、都守郡九ヶ村(妹尾村、太田村、榎川村、末左村、山崎村、大野村、島羽村、栗坂村、徳芳村)、賀陽郡四ヶ村(庭瀬村、宮内村、立田村、原小村)にて二万九千二百石を領し、庭瀬に封ぜられたのである。即ちこの地は天正十年高松の後、毛利織田兩氏の間に和議が成立し、備前の

宇喜多秀家が高梁川を堺に以東の地を併合して九万余石を領し、同十四年にその臣岡、豊前守利勝が横地を行ひ、海浜に瀨んで城寨を構築した。その四



城を利用して居館を築き、その間に城を築いた。城郭の拡張に努め内海に便をつくり、津留を深く堀り、西國の往來を城下に通じ、或は旧領地であつた恩島地方から多くの富豪を招くなど街衢の繁栄に努めた。ここに及んだのである。よつて

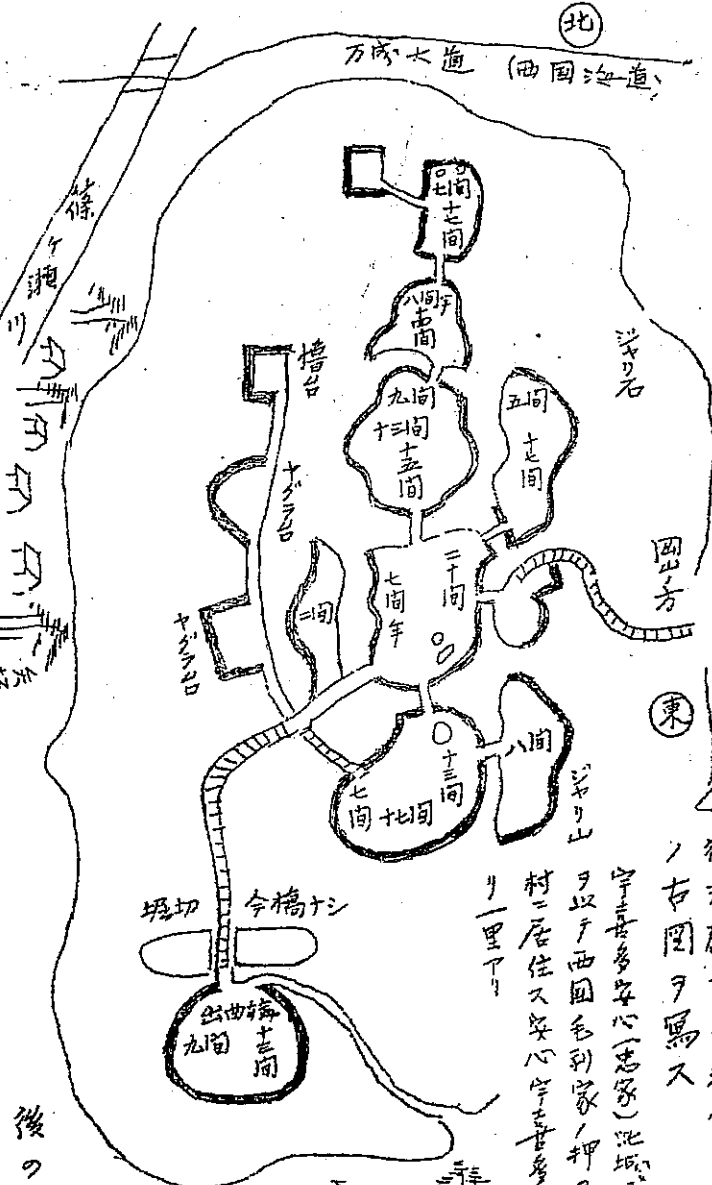
九年にはその子正安の三男安成に妹尾領一千五百石を分知し、更に元禄十五

宇喜多の領地と高梁川

年には早島、安九の孫安通に中庄領四百石を興へるなど、戸川支族はこの地
 方に繁行するに至つたのである。
 慶長十九年十一月大坂の冬陣には岡山城主池田忠結、津山城主森忠政等
 とともに備中組頭として出陣し兵庫の神崎川を渡り、中島の敵を逐ひ進んで
 大和の城を奪取した。城兵は一戦も交へずして退却するを急迫して多くの
 首級を得た。後の勝安とともに家康より感状を賜はつた。岡ヶ谷は西軍の和
 議がなつたが、同年十二月再び破れ翌元和元年四月出陣し武功をたてた。
 大坂勢はよく戦つたが、烏谷の衆にして大名としてこれに應じたものはなく
 統制力に欠けた結果、ついに敗れ大坂城は炎々濛々火に包まれて陥落した。
 素頼、母淀君を始め多くの豪勇は自決したのである。
 ここに宇喜多直家についでカレ記して直直くこととす。

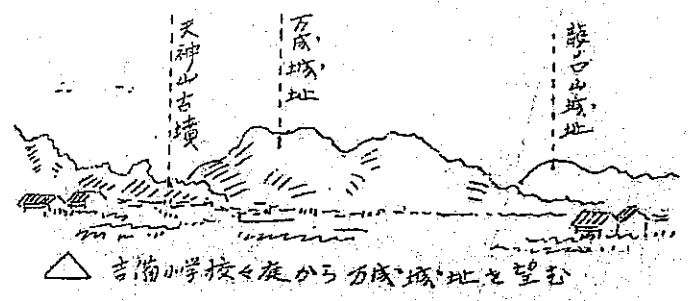
改正は宇喜多直家の全書忠家の子二方に生れ始め備中の毛利勢の押入として万成城を陥つたが、但
 の勇家と意見と異にし、岡山を去つて徳川家康に属した。関ヶ原の役には赤軍にあって立働きの姓を坂崎
 羽守信頼と改め、後、石見國津和野領主二万石に封ぜられた。元和元年五月大坂の夏陣に出陣した。この時
 城は上堀にこまれば落城に迫つた頃、家康は豊臣秀頼の室千姫を嫁にせよと命じて攻めさせた。思ひに敵軍は退き、千
 姫を娶つて、一石を加増せよとある。と大言あがけ、千姫は信頼は早身勇健、経達と悦ばせ、城の中に飛び込み、千
 姫を以て自腹に家康の在陣人帰るを勇ませである。戦後、この志を遂げ、一五石の加増は賜つたが千姫は信頼の老衰をもち、時
 差の計りの高かつた宇喜多直家の御孫と云ふ。この千姫は、宇喜多直家の御孫と云ふ。この千姫は、宇喜多直家の御孫と云ふ。
 はお知信頼の方である。天下を自由にすべし、千姫の御孫である。約束はしたものの、これは困ったことであつた。
 る。か、千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。
 やすくと云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。
 こともなく、痛むであらう。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。
 の頭一徹の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。
 られ、千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。

て、自らの意志をつらぬいた千姫は当時先達を歩んだ新しい女性であつたといへよう。
 結婚直前に引いた信頼は津和野の田舎侍におさまり、おろくとして、明善酒に似たり行政も、顔が、本である。測
 止のものは心配し、あまり酒を飲み過ぎるとおからだに毒で御座います。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。
 始めの頃は、豊臣家と一時的におさまる。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。
 和三年五月に信頼は千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。千姫の御孫と云ふ。



宇喜多直家(忠家)池田、津和野郡六万石ノ知行
 ラ以テ西國毛利家ノ押ラヌル也但シ、山下ノ野坂
 村ニ居住ス、安永ノ宇喜多直家ノ御孫也此城岡山ヨ
 リ一里アリ
 野坂村
 此村ヨリ城マデ六七
 町程アリ

下の覇権を握つた。
 ちのである。岡ヶ原の役後、十六年の春
 月が流れて全く滅亡し、喜実上徳川氏、天
 元來豊臣、徳川両氏は姻戚関係にあつた。
 後のとどめをさされた
 の役は豊臣家の最
 劇的の主人公で
 ある。この大坂



産地直賣店
薪炭卸小賣

西平薪炭店

吉備町栄町六一七
電話(吉備)三九番七

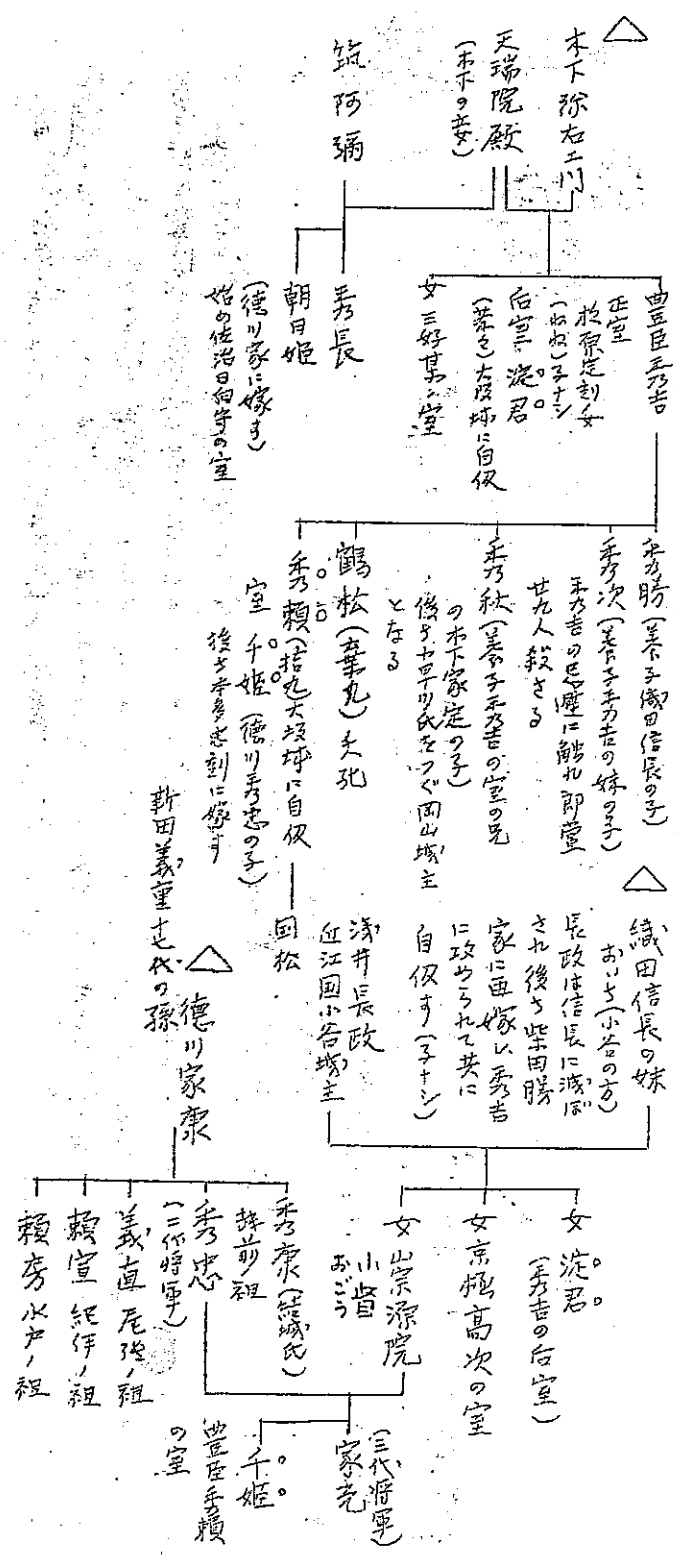
院了本
瀬庭町備吉郡窪都
祭例天尊支利摩

毎月新十八日

達安は寛永四年十一月廿五日病氣になり六十一歳で逝去した。法諡 不妻院覚如日真大居士 という。池上本行寺に葬る。早島には達安明神といふ一小社がある。達安を主神とするもので、早島領主戸川氏支流の祀る處である。

始め法名は覚如と稱し不妻院と号した。後在撫川六代戸川達義の時に、身延山日舜上人より日真の号を追奉せられたもので、改めて建碑せられた。墓標は盛隆寺の戸川家廟所にある。晩年には頭は白髪に包まれ、齒は悉く落し容貌は恰も金剛力士の化身のようであつたと傳へられる。

(せわり)



千姫は淀君の姪にして、慶長八年秀吉の北後秀頼が十一歳の時、千姫が七歳で奥入したのである。元和元年の役には千姫は十九歳にして秀頼に北別後孝多忠刻と婚し、姫路城に豪華な居館をたが三年後不幸にして忠刻は病死し未亡人となり、父秀忠の建築した吉田殿にへり余生を送り、寛文五年に七十歳でこの世を去ったのである。「吉田通世は二階めら招く」の夏名は芝居や文学に俗諺として後世に遺つてゐるが、果して事実かどうか疑はしい。明らかなる處である。尤に豊徳の姻戚關係を示すと。